

# ウタツピノカ ウオウペカシ

Utaspano uoupekare 互いに支え合う 葛野辰次郎『キムスポV』より

## 76人のご遺骨が浦幌に帰還します。

浦幌アイヌ協会による遺骨返還請求訴訟は2017年3月22日、被告・北海道大学との間で和解が成立しました。

当日の原告記者会見の様子をお伝えします（全文は文書研ウェブサイトどうぞ）。

### 差間正樹・浦幌アイヌ協会会長

今回の和解については、この裁判の和解協議をリードしてくれた裁判長にまずお礼を言わせていただきます。それと、遺骨返還につきましては、小川隆吉エカシ、城野口ユリフチ、この二人が開いてくれた道に私たちはついてきただけです。本当に小川隆吉エカシ、いまこちらにいらっしやいますけれど、本当に尊敬しております。私たちは自分の土地から持って行かれた骨を自分の土地に戻したい。この思いでこの裁判に参加いたしました。祭祀承継者とか、そういった言葉は私たちの文化ではありません。私たちははまったく馴染まない言葉です。私たちは先祖の骨は土の中に静かに眠っていただき、そのことによって、先祖は、神様の世界とわれわれの世界を行ったり来たりする。その静かな眠りを妨げるようなことはしてはならない。これが私たちの言い伝えです。北大の納骨堂の中に、まるで棚のようなところに、ズーッと放っておかれたこの遺骨を、これでやっ

と私たちの土地に返してもらおう。私たちの土地に持って行って、安らかに眠って

いただく。その道がこれでやっとなげました。この裁判につきましては、市川弁護士をはじめ、北大開示文書研究会のみなさん、いろいろな方たちに私たちを助けていただきました。そのおかげで今回に至ったわけです。この場を借りて本当に御礼を申し上げます。ありがとうございます。

### 記者

遺骨に関する重要な情報は、ほぼすべて失われています。非常に皆さんの遺骨管理しかされてこなかったことに対するお気持ちは。

### 差間さん

私たちの土地から骨を持って行くときは、まったく自分たちの都合で。頭蓋骨の形状を見て、その人の頭の形を見て民族的な優劣が決まるとか、まったく根拠のないような研究のために私たちの先祖の骨を持って行って。いま、北大をはじめ研究機関、各地の大学にある骨を「返してほしい」と言ったら、「祭祀承継者じゃなければダメ」だとかいろいろな条



記者会見する差間正樹・浦幌アイヌ協会会長。

件をつけております。その管理の様子に至っては、私が初めて北大の建物（納骨堂）に行った時は（遺骨は）プラスチックの箱に入っております。北海道ウタリ協会の総会で、「工具箱じゃあるまいし、自分たちの先祖をそんな箱に収めておいて、本部はいたいどう思っているんだ？」と発言したことがありました。不思議なのは、次の年には全部、白木の箱に入れ直してありました……。大学は、何か違う価値観で動いているように思えます。自分たちの先祖がそんな扱いを受けたらどうなるんだらう。今となっては、頭蓋骨と手足の骨とがまるで符合しないような形であったり、いったい何人分の骨があるやら、どこから掘り出したものやら、それもはっきりしないような形でこうやって保存してあった。まったく――腹が立つ以外のなものでもないですね。自分たちの先祖がそんな扱いを受けたらどうなるか――？ 今後、何とか全国の大学にも、研究機関にも、こんな状態を早く解消してほしい。今はそう思うばかりです。

# 疑問符だらけの こたまさくざえもん 児玉作左衛門・浦幌町愛牛旧墓地人骨発掘「研究」事件

あいうし

浦幌アイヌ協会が訴訟を経てようやく北海道大学から取り戻すことに成功した遺骨の大半は、今から80年あまり前、同大学医学部解剖学第二講座の児玉作左衛門教授らが同町愛牛地区のアイヌ墓地から持ち去っていったものです。しかし彼らは発掘時のフィールドノート(野帳)すら残しておらず、当の北海道大学さえ、当時の状況をほとんど解明できていません。北海道大学が公表した「北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書」(2013年3月) 37ページから、この事件に関する記事を引用・転載します。

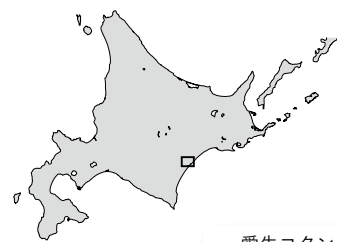
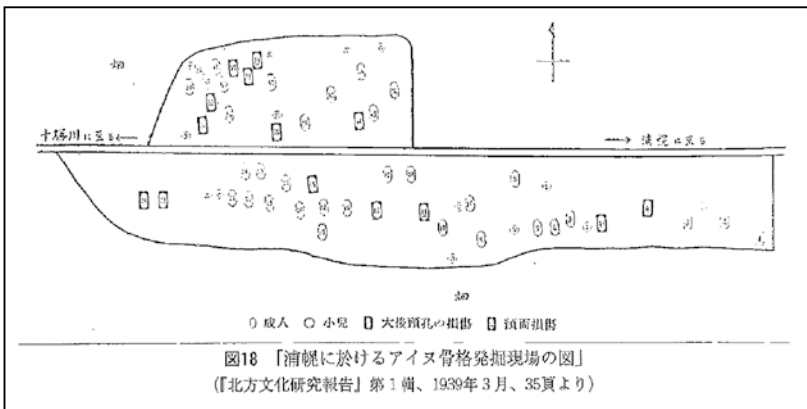
## 浦幌町愛牛旧墓地発掘(1934年)

児玉作左衛門は、旧愛牛墓地発掘について、「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」において、以下のように述べている。

愛牛はタンネオタとも称せられたところであるが浦幌駅より西方約3里、十勝川の東岸でその河口より遡ること3里半の所にある小部落である。

発掘経緯については記載がない。

アイヌ人骨発掘墓坑の位置と方向を記載した「浦幌に於けるアイヌ骨格発掘現場の図」を載せてはいるが、愛牛における旧墓地の位置を示していない。そのため、旧墓地の位置を



愛牛コタン旧墓地(推定)

河川改修によって現在は十勝川の河川敷に組み込まれています。(浦幌アイヌ協会調べによる。)



地図上で確認することはできない。

野村愛介は、「北海道アイヌ頭蓋骨に於ける齧歯(むしば)に就いて」において、以下のように述べている。

愛牛は昔タンネオタとも称せられたるアイヌ語の部落名なり。……発掘個所は部落の防風林中に埋葬せられたる無縁墓地にして明治維新以後のものならんと思はる。発掘総数62体分にして成人45(男20、女25)、性不明2、小児15なり。埋葬は胆振地方のものとは大いに異なり凡て頭部を北方に向けたる背位伸葬にして腹臥位は一例もなし。副葬品は胆振地方のものに比して比較的少く棺を用ひしものと用ひざりしものとあり。棺を用ひしも

のもキナにて包み更に棺に入れたるものの如し

これも発掘経緯については記載がない。

「アイヌ民族人体骨発掘台帳」には、「昭和九年十月二十七日―十月三十一日、愛牛ニテ発掘」とあり、発掘アイヌ人骨数は62体を数える。アイヌ納骨堂内の四肢骨箱の中には、「昭和九・一〇・下旬」と記載された木札がある。

児玉作左衛門が、1969年には「貴重な十勝アイヌの集団発掘もこのおかげ」と北海道警察部の協力を得られたと回想していたことは先述した。また、十勝地域における「集団発掘」は、浦幌町愛牛における発掘以外は見当たらない。

	番号	部位	性別	推定年齢	個人特定	出土時期	出土場所	発掘・発見主体	出土等の経緯
1	713	全身骨	男?	成人	否	1934年 10月27日 ～10月31日	浦幌町愛牛	医学部解剖学 第二講座	解剖学研究資料 収集のため、 旧墓地を発掘
2	714	全身骨	男	成人					
3	715	頭骨	不明	こども					
4	716	全身骨	不明	成人					
5	717	頭骨	不明	成人					
6	718	全身骨	男	成人					
7	719	全身骨	不明	成人					
8	720	全身骨	男	成人					
9	721	頭骨	不明	成人					
10	722	全身骨	不明	成人					
11	723	全身骨	不明	成人					
12	724	全身骨	男	成人					
13	725	全身骨	男	成人					
14	726	全身骨	女	成人					
15	727	全身骨	男?	成人					
16	728	全身骨	男	成人					
17	729	全身骨	女	成人					
18	730	頭骨	不明	成人					
19	731	全身骨	不明	成人					
20	732	全身骨	女	成人					
21	733	頭骨	不明	成人					
22	734	頭骨	男	成人					
23	735	全身骨	男	成人					
24	736	全身骨	不明	成人					
25	737	頭骨	不明	成人					
26	738	頭骨	不明	成人					
27	739	全身骨	女	成人					
28	740	全身骨	男	成人					
29	741	全身骨	不明	成人					
30	742	頭骨	不明	成人					
31	743	頭骨	不明	成人					
32	744	全身骨	男?	成人					
33	745	全身骨	女	成人					
34	746	全身骨	女	成人					
35	747	全身骨	女?	成人					
36	748	頭骨	不明	成人					
37	749	頭骨	不明	成人					
38	750	頭骨	不明	成人					
39	751	頭骨	不明	成人					
40	752	頭骨	不明	成人					
41	753	全身骨	女	成人					
42	754	全身骨	女	成人					
43	755	全身骨	女	成人					
44	756	全身骨	女	成人					
45	757	全身骨	男?	成人					
46	758	全身骨	男	成人					
47	759	頭骨	不明	成人					
48	760	頭骨	不明	成人					
49	761	頭骨	不明	成人					
50	762	頭骨	不明	こども	不明	不明	不明	不明	
51	763	全身骨	不明	こども	可能性あり	1934年 10月27日 ～10月31日	浦幌町愛牛	医学部解剖学 第二講座	解剖学研究資料 収集のため、 旧墓地を発掘
52	764	頭骨	不明	こども					
53	765	全身骨	不明	こども					
54	766	頭骨	不明	こども					
55	767	頭骨	不明	こども					
56	768	頭骨	不明	こども					
57	769	頭骨	不明	こども					
58	770	頭骨	不明	こども					
59	771	頭骨	不明	こども					
60	772	頭骨	不明	こども	否	不明	浦幌町十勝太	不明	不明
61	773	頭骨	不明	こども	可能性あり?	不詳	浦幌町内 (不詳)	不詳	不詳
62	774	全身骨	不明	こども					
63	775	頭骨	不明	こども					
64	776	頭骨	不明	不明					
65									
66									
67									
68									
69									
70									
71									
72									
73									
74									
75									
76									

**裁判の和解によって北海道大学から  
浦幌アイヌ協会への返還が実現した  
76人の遺骨たち**  
出典／北海道大学「北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書」（2013年3月）ほか

# 杵臼からのメッセージ2016

アイヌ遺骨返還訴訟の和解にもと

づき、去る7月17日、北海道大学に長らく持ち去られていた12体の遺骨が、「コタンの会」の手によって、浦河町杵臼共同墓地に戻されました。地元のみならず、各地からの大勢の参列者がどれほど心安らいたことでしょうか。杵臼コタンのシンリッ・エカシ・フチ（祖先の方々）も、同胞の80数年ぶりの帰郷をさぞ喜んでくださったと思います。「先住民の権利に関する国際連合宣言」（2007年採択、UNDRIP）に列挙された「集団としての権限」の一端を、原告や「コタンの会」は史上初めて取り返しました。

ところが北海道大学は、ほかの地域からの収集遺骨については、被害コタンからの請求がない限り、すべてを「象徴空間」に送る方針を変えません。他大学・博物館も同様のようです。

かつて大学研究者たちが収集したアイヌの遺骨は、「象徴空間」などに再集約するのではなく、それぞれ元のアイヌコタンの墓地にこそ返

還すべきです。

かつて、一方的に発掘し、持ち去った過去の歴史を解明することなく、大学や研究者、政府の責任のありかを検証せず、謝罪もありません。遺骨を一方的に集約し、再び研究対象とすることは、UNDRIPに反し、「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」（2008年国会決議）を空文化する、著しく人道的から逸脱した暴挙と言わねばなりません。

以上をふまえ、私たちは次のメッセージを発信します。

(1) 政府は、「象徴空間」への遺骨集約を中止し、収集遺骨を早急に元のコタンに返還する手立てを講じましょう。「杵臼」をモデルに各地アイヌ集団（コタン）への遺骨・副葬品完全返還のプログラムを確立しましょう。近代以後のアイヌ政策を反省し、アイヌに謝罪し、コタン復興を支援しましょう。

(2) アイヌ遺骨を収蔵する大学、

研究機関、博物館などは、遺骨収蔵の経緯を検証し、その結果を公表し、自らの責任を認めて、アイヌへの加害を謝罪しましょう。コタンへの遺骨の返還に誠実に取り組みましょう。

(3) 墓地発掘・遺骨持ち去りを受けた各地のアイヌ協会は、返還遺骨の受け入れとイチャルパ／シンヌラツパ（祖先の追悼）に向けた活動に取り組みましょう。また各自治体は地元の被害について調査・公表し、遺骨受け入れ活動を支援しましょう。

(4) 市民は、アイヌに対する植民地支配・同化政策について学び合い、地元への遺骨返還を支援しましょう。

2016年11月25日、「歴史的な再埋葬を語る集い」（北大開示文書研究会・コタンの会共催、北海道クリスチャーセンター）参加者一同

## 遺骨を迎える

カムイノミとイチャルパ

8月19～20日 浦幌アイヌ協会

9月16～17日 紋別アイヌ協会

長らく北海道大学に留め置かれていたご遺骨の帰郷に合わせてこの秋、浦幌アイヌ協会（差間正樹会長）と、紋別アイヌ協会（畠山敏会長）が、カムイノミとイチャルパを執りおこないます。どなたでもご参列いただけます。詳しい日時・会場などのご案内は、北大開示文書研究会ウェブサイトでご提供します。



北大開示文書研究会ニューズレター No.17 2017年7月22日

編集・発行 北大開示文書研究会

共同代表 清水裕二、殿平善彦

事務局 〒077-0032 北海道留萌市宮園町3-39-8 (三浦忠雄方)

FAX 0164-43-0128 <http://hmjk.world.coccan.jp>

ロゴデザイン 浅野由美子